

日比間の人の移動における支援組織の役割（3）

「JFC」の NGO への参画の段階に注目して

The Roles of Support NGOs for Migration between the Philippines and Japan (3)

Focusing on the Stages of JFC's Participation in the NGO activities

原めぐみ HARA Megumi（和歌山工業高等専門学校 NITWC）

キーワード：支援組織、若者支援、社会運動、NGO、Japanese-Filipino Children (JFC)

1. 研究の背景と目的

1970年代後半より日本とフィリピン間の人々の移動が活発化したことによって、日本人とフィリピン人を親にもつ子の出生数が増加した。当初から日本人男性が既婚者であるなどの理由から婚外子問題がセンセーショナルに報道された。父親に遺棄され、経済的に困窮し、日本国籍が取得できない子どもたちが数万人単位でいると NGO も報告している。日比両国の支援組織は、アジア女性蔑視の延長線上に、この子どもたちが抱える問題があるとし、解決に向けた取り組みは社会運動となった。日本人とフィリピン人を親にもつ子どもたちは「Japanese-Filipino Children」、略して「JFC」と呼ばれるが、これは運動の中で構築された用語と言ってよい。

マイノリティの若者と支援組織との関係については、「居場所研究」との親和性が高い。日系ブラジル人の青年団体を調査した山ノ内(2014)は、そこに集う若者たちがブラジルと日本の双方において形成される「居場所」が、彼らのアイデンティティ形成にいかに関与するかを考察した。日系ブラジル人の若者たちが、青年団体に関わることによって「ニッケイ」としてのアイデンティティを肯定的に捉えるようになると考察する(p.44)。また、竹中(2015)は、在日コリアンが関わった戦後日本における外国人政策の変容への関わりを分析した。2・3世にとっては、「アイデンティティの確認」や「承認されること」が地域社会での運動の中で重要であったという(p.138)。さらに、安本(2015)は、在日コリアン青年連合「KEY」に参加する若者たちへのインタビューから、世代によって「居場所」への意味づけの違いがあり、時に「居場所のせめぎ合い」という状況も生じるのだという。

本報告では、「JFC」と呼ばれる子ども・若者たちの支援組織での立ち位置をどう意識しているのかを参画の段階によって分析し、彼らのアイデンティティ形成への関わりや居場所としての支援組織の役割について検討する。

2. 研究の方法と対象

報告者が参与観察を行なった支援組織は、マニラ首都圏に事務所を構える Batis、Maligaya House、DAWN の3団体である。Batis と DAWN は帰国したエンターテイナー女性への支援が活動の原点であるが、「JFC」への事業を行っており、それぞれ Batis Yoghi と DAWN J.F.C. for Change という若者グループを組織化している。Maligaya House は主に法的支援をしているが、「JFC」向けの奨学金制度がある。

方法論としては、2018年5月と8月にフィリピンでインタビュー調査とフォーカスグループディスカッションを実施した。3団体のいずれかにメンバーとして参加している、あるいは参加していた経験がある16歳～32歳までの9名（女性5名、男性4名）に聞き取りを行った。

3. 若者たちにとっての支援組織の機能

支援組織の役割を若者たちの NGO への参画の段階に着眼して以下、分析する。

1) ニューカマーステージ：支援—被支援の関係

若者たちが「JFC」の支援組織を知るきっかけは、母親と連れ立って活動に参加する場合や、すでに支援組織に関わっている「JFC」の友達からの紹介、あるいはインターネットやテレビなどメディアを介する場合がある。初期段階、「ニューカマーステージ」においては、NGO が発信する情報を享受し、経済的精神的支援を受ける側である。これまでフィリピン社会の中で、名前や見た目などに自他の差異を感じながらも、父親に遺棄されていることで日本とのつながりがなかった「JFC」たちは、支援団体を通じて日本の情報を得る。DAWN で参与観察と子どもたちへのインタビューを行った Seiger(2017)は、NGO の言説の中に「日本人性」が強調されていると述べ、小ヶ谷(2013)も NGO の活動によって子どもたちが「JFC になっていく」と認めている。

2) アクティブメンバーステージ：居場所としての機能

初期段階で、支援組織が実施する様々な活動に参加する中で、「JFC」の若者たちはエンパワーされていく。「JFC」という新たなアイデンティティを持ち、「JFC」を代表して会議で発言したり、支援組織の活動外でも「JFC」と名乗るようになる。例えば Batis 傘下の若者組織 Batis Yoghi では、メンバーの能力開発に力を入れており、毎年開催されるサマーキャンプでは、若者メンバー自身が今の自分たちにどんな能力や知識が必要かを考え、キャンプの内容を作っていく。また、新メンバーのリクルート活動にも積極的に関わる。このステージでは、自分より若いメンバーやまだ支援を受けていない「JFC」を支援組織につなげる役割も果たし、自らもピアカウンセリングなどを行い、支援する側になる。

3) 卒業ステージ

しかし、アクティブメンバーも永続的に NGO の活動に関わるわけではない。以下のような理由により支援組織から「卒業」していく。①法的支援などの解決 ②生殖家族の形成など新たな親密圏への移行 ③進学や就職など興味・関心の変化 ④NGO の方針との意見の不一致。④に関しては、特に「移動」に関する見解の違いが顕著である。NGO は、その活動経緯から、国際労働力移動に反対の立場をとる。しかし、フィリピン社会で育った若者にとって、海外で就労することはより良い生活のための現実的なオプションの一つである。

4. まとめ

本報告では、若者にとっての支援組織の役割を参画の段階に沿って分析した。支援組織がアイデンティティ形成に影響し、居場所として機能すると確認できたが、支援組織を客観視することで居場所から「卒業する」こともまた重要な人生選択となっている。

小ヶ谷千穂(2013)「支援組織との関わりから見る JFC のアイデンティティと複層的な”日本経験”：「JFC 研究」のための試論～」『国際交流学部紀要』15号,189-213頁。

竹内理香(2015)「戦後日本における外国人政策と在日コリアンの社会運動」『川崎医療福祉学会誌』24号, 2, 129-145頁。

安本博司(2014)「在日コリアンの居場所をめぐる考察：KEYに参加する若者に着目して」『多文化関係学』11号,23-36頁。

山ノ内裕子(2014)「トランスナショナルな「居場所」における文化とアイデンティティ：日系ブラジル人の事例から」『異文化間教育』40号, 34-52頁。

Seiger Fiona-Katharina (2017) Claiming Japaneseness: recognition, privilege and status in Japanese-Filipino mixed ethnic identity constructions. In Zarine L. Rocha & Farida Fozdar (Eds.) “Mixed Race in Asia” pp. 98-114.

※ 本研究は科学研究費基盤 (B) 「日比間の人の移動における支援組織の役割：移住女性と JFC の経験

に着目して」(研究代表者：小ヶ谷千穂)による研究成果の一部である。